

令和8年度 福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

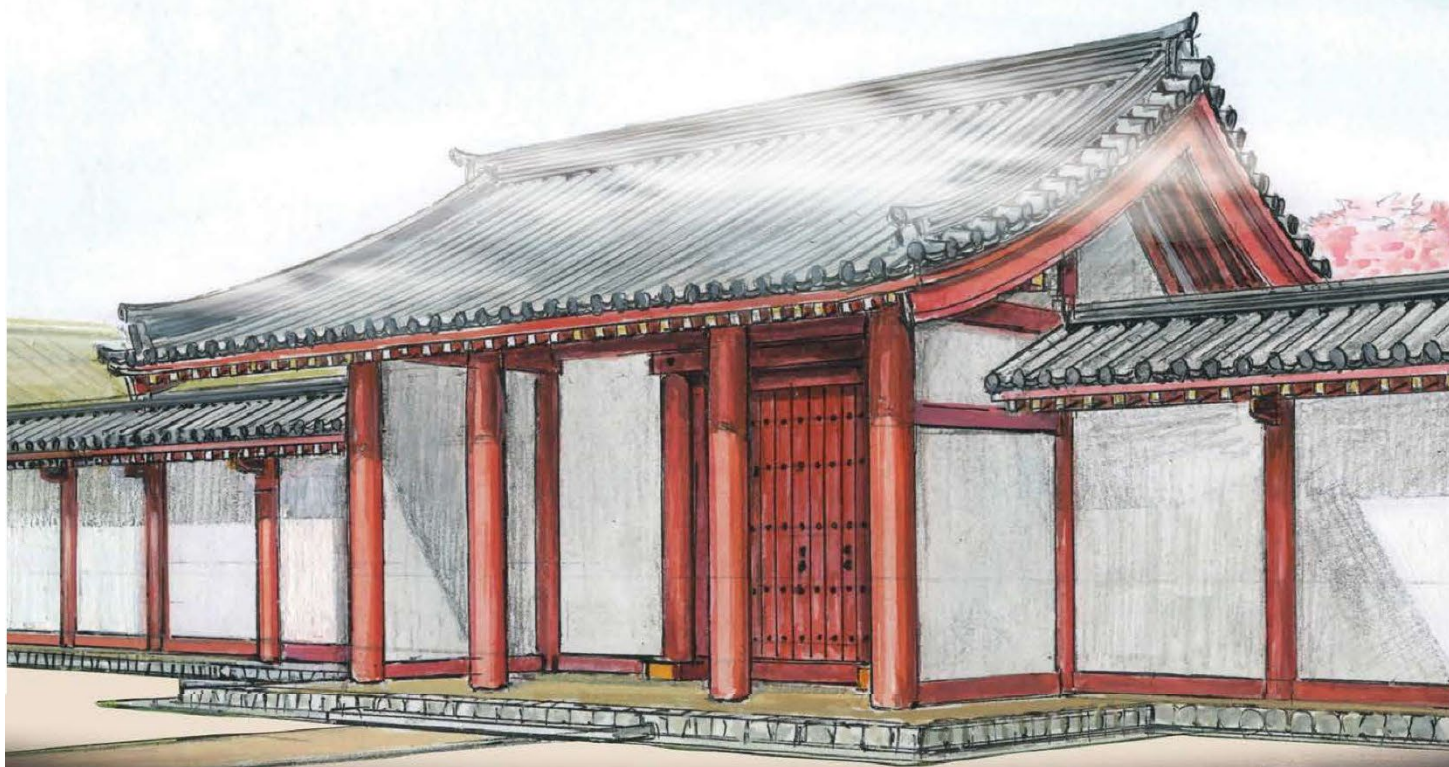
鴻臚館

—アジアの交流拠点都市
福岡の原点をひもとく—

第2回 令和8年9月26日(土)

佐藤 信 氏 (東京大学名誉教授)

「奈良・平安時代の鴻臚館」



会場

福岡市美術館

福岡市中央区大濠公園1-6

時間

13時15分～15時00分

※終了時間は多少前後する場合があります。

定員

250名(事前申し込み制)

※申し込み方法についてはホームページでお知らせします。

埋蔵文化財センターホームページ <http://bunkazai.city.fukuoka.lg.jp/maibun/>

問い合わせ先：福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田2-1-94 電子メール：maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp
TEL：092-571-2921 FAX：092-571-2825

【背景】鴻臚館北館東門（復元図）

第3回考古学講座の申し込みについて

今後開催する講座につきましても、各回ごとにお申し込みが必要となります。

第3回講座の申し込みについては10月5日に当センターHPの**新着情報**へ掲載する予定です。

※市政だよりへの掲載はございませんのでご注意ください。

ぜひ次回以降もご応募いただけますと幸いです。

■申込方法：往復はがき・メールいずれかの方法で1通まで。

代表者や小さなお子様を含め、1通につき最大2名まで申込可能です。

重複申込はご遠慮ください。

※重複（氏名、メールアドレス、電話番号などの一致）が確認された場合も、申し込みは1件として受け付けいたします。

■必要事項

【代表者】

- ・氏名（ふりがな）
- ・電話番号（日中連絡のとれる電話番号）
- ・郵便番号・住所
- ・年齢

【同行者】

- ・氏名（ふりがな）
- ・年齢

【その他】

（車椅子で来場予定の方、来場の際にベビーカーを利用予定の方、お手伝いが必要な方はあらかじめお知らせください。）

奈良・平安時代の鴻臚館

佐藤 信（東京大学名誉教授、横浜市歴史博物館長、くまもと文学・歴史館長、
福岡市鴻臚館跡整備検討委員会委員長）

はじめにー大宰府と鴻臚館ー

奈良時代の大宰府は、首都の平城京と比肩される都会であった。都の平城京を、大宰少貳として大宰府にあった小野朝臣老は、「あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」（『万葉集』巻三、三二八）と美化して歌っているが、筑紫国に赴任する海路途上の柿本朝臣人麻呂が「大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ」（『万葉集』巻三、三〇四）と詠んだように、大宰府は「遠の朝廷」とも称されていた。帥以下の大宰府の官人たちは、『続日本紀』（神護景雲三年〔七六九〕十月甲辰条）に

大宰府言さく、「この府は人・物殷繁にして天下の一都会なり。…」と大宰府を「天下の一都会」と称している。宮都の平城京に後れをとらない人口と流通をもつ都市像を自負しているが、大宰府の発掘調査の進展により、かつて鏡山猛氏が「大宰府都城」と呼んだ条坊制の構造をもつ大宰府郭の都市像が明らかになってきている。

最近のあたらしい日本古代史の研究は、めざましい進展がある。その動向は、①東アジア（東ユーラシア）的視野から日本列島の古代史をみると、②発掘調査成果や新発見の木簡など出土文字資料によって、歴史像を具体的・立体的に再構成するようになったこと、③これらによって列島各地の地域の古代史像が明らかになってきており、合わせて境界を越えた地域間交流の盛行が解明されてきたこと、と整理できる。その結果、日本列島の古代史の多元的な展開が指摘されるようになった。かつて、古代国家が編纂した六国史・律令など文献史料によって国家・天皇・畿内・中央を中心に描かれがちであった古代史像に対して、列島各地域の古代史像が描かれるようになってきた。今日では、中央からと地方からのまなざしの両方の視座を総合した列島の古代史が目ざされている。

こうした研究動向において、各地に置かれた国府（国衙）・郡家（郡衙）など地方官衙の発掘調査成果は、そこから出土する木簡など出土文字資料による歴史情報と合わせ、日本古代国家が中央集権的体制をどのように実現し得たのか、中央集権性の実像を検討する上で大きな焦点となっている。大宰府は、平城宮跡・多賀城跡（陸奥国府でもある東北城柵）とともに日本古代の「三大史跡」（大規模遺跡）として数えられ、古代最大の地方官衙である大宰府のあり方の解明は、中央と地方を結ぶ接点を理解する上で、大きな焦点となる。

大宰府史跡では、福岡県立九州歴史資料館による多年の発掘調査・研究の蓄積によって、古代大宰府像の解明が進んでおり、太宰府市教育委員会による条坊域の調査・研究成果も合わせて、古代都市大宰府像が見えてきた。また、福岡市の博多湾に面した鴻臚館跡（旧平和台野球場跡）の調査・研究の成果も、大宰府全体の実像解明に進展をもたらした。こうして律令国家の地方支配構造が立体的に明らかになってきた。

1. 遠の朝廷大宰府

◎遺跡群としての大宰府史跡

「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府は、古代最大の地方官衙であり、政庁正殿の都府楼

を中心として、様々な機能を果たす多様な施設から構成されていた。大宰府を構成する諸官司（曹司）や観世音寺などの寺院、防衛のための古代朝鮮式山城群など、その広がりには多種類・広範囲に及ぶ。

史跡としては、

大宰府跡・大宰府学校院跡・観世音寺境内及び子院跡・筑前国分寺跡・国分瓦窯跡・塔原塔跡、大野城跡・水城跡・基肄城跡・鴻臚館跡・怡土城跡などがあり、付随する官司や生産遺跡として、

不庁地区（官衙群跡）・来木地区（官営工房群）・月山東地区（官衙跡）・大宰府条坊跡（「朱雀大路」など）、主船司・警固所などがある。

大宰府を取り囲みネットワークを組む史跡・遺跡群としては、

古代朝鮮式山城跡・神籠石系山城跡・烽（とぶひ）群・地方官衙遺跡（国府・郡家）・瓦窯跡（老司瓦窯跡など）・土器窯跡（牛頸窯跡など）などがあり、

寺院・神社では、

観世音寺・戒壇院・筑前国分寺・国分尼寺・塔原塔跡・竈戸山寺・太宰府天満宮（安楽寺）などが知られる。

また大宰府をめぐる交通関係遺跡として、西海道跡・古代官道跡、駅家跡など。

大宰府をめぐる遺跡群を総体として大宰府史跡群ととらえる視角が必要。

◎大宰府史跡の調査・研究

大宰府史跡の発掘調査・研究を中心的に進めてきた福岡県立九州歴史資料館。大宰府史跡や関連遺跡の発掘調査・研究、史跡整備や博物館展示を行い、さらに九州各地の発掘調査を牽引してきた。

大宰府史跡については、地道な発掘調査の積み重ねの上に、多くの調査成果が蓄積されてきた。大宰府木簡の出土も大きな成果。また太宰府市教育委員会の発掘調査による大宰府条坊遺跡の確認も注目される。

「文明のクロスロード」に位置する遺跡群としての大宰府史跡群は、東アジアにおける日本古代国家を解明する上できわめて重要。その際、遺跡だけでなく史料・建造物・美術工芸品など多様な文化遺産からなる歴史資料を、総合的・学際的に調査・研究することが求められる。先学たちによる「大宰府研究会」は、そうした意図があった。大宰府をめぐる多様な歴史資料・文化遺産を学際的・多角的に調査・研究する「大宰府学」が、日本史・考古学・建築史・美術史・国文学・歴史地理学・東洋史・保存科学などの学際的な共同研究によって進められることが期待されてきた。

2. 大宰府と対外交流

（1）大宰府の特質

日本古代の地方官衙としては、大宰府、国府（国衙）、郡家（郡衙）のほか郡家出先機関・城柵・関・駅家などが挙げられるが、その最大のものが大宰府である。対外外交を管轄し、西海道の九国三島を統括するという国府をしのぐ組織であり、官司の規模も国府をはるかにしのぐ。長官の大宰帥の官位相当は親王四品・従三位であり、大国の守の従五位上相当をはるかに上回る上級貴族が任じられていた。大宰帥の職掌としては、国司とは違って「蕃客・帰化・饗言燕」が規定されており、中国・朝鮮や隼人・南島に対する対外外交の前線を担う点が大きな特質といえよう。

外交や西海道統括という中央政府に準じた行政を担うところから、大規模な官人構成をもち、管下の官衙（曹司、実務官衙）としても多様な部署をかかえる。

古代都市としての大宰府については、大宰府が平城京の条坊制にならって条坊をもつ府郭を備えていたことが、他の国府などとは異なる。大宰府の条坊遺跡は、太宰府市教育委員会による地道な発掘調査によってその姿が明らかになってきた。鏡山猛氏が想定した都城型条坊説そのままではないが、「朱雀大路」や条坊が知られている。

都府楼の政庁の前面に広がる官庁街としての不庁地区の展開、朱雀大路や条坊道路の存在、街区の区画にあわせて長大な南北棟建物が規格性をもって配置される「客館」のような町並みなどは、大宰府の府郭が宮都になった条坊をもち、「天下の一都会」と称される都市的実態をもったことを示している。

（２）大宰府の機能

大宰府が果たした機能は、外交・行政・財政・軍事・宗教・給食・交通などの諸分野にわたる多様なものであった。外交機能をもち西海道の統治拠点でもあり、国府の上に位置づけられることも、その多様な機能に結びついている。

外交機能は、東アジアの中国・朝鮮や隼人・南島に対する外交を担うもので、新羅使・渤海使や南島などからの外国使節等の来朝に対応している。日本からの外交使節も、遣唐使だけでなく、『万葉集』に和歌群を残す遣新羅使も、大宰府を経由して海を渡って行った。これらの内外の外交使節を迎える迎賓館として、博多湾岸には鴻臚館（筑紫館）が営まれ、大宰府との間は水城の西門や東門につながる直線官道で結ばれていたものであった。南島については、天平七年（七三五）に大宰大貳の小野老らが南島に派遣され、各島に島の名前などを記した牌（立札）を立てている（『続日本紀』天平勝宝六年二月丙戌条）ように、大宰府の管轄するところであった。

行政機能は、九国三島の西海道諸国に対する行政を総括する役割である。

財政機能では、西海道諸国の調庸物は、長門国以東の一般諸国（陸奥・出羽を除く）のように平城京に貢進するのではなく、大宰府に集約された。大宰府の「蔵司」は、こうした大量の調庸物を収納する倉庫群が配置された官司であった。諸国で口分田を班給した余りの「公田」（乗田）では、耕地を農民に賃租して（貸して）収穫の五分之一を地子として納めさせる地子経営が行われた。その公田地子は、内国では太政官に送納して太政官の財源となったが、西海道においては、大宰府に送納してその財源となった。八世紀半ばからは、「府官公廩」として大宰府官人たちの得分（給与）となった。この府官公廩も、大量に大宰府で収納された。

軍事機能では、対外防衛や対隼人・南島の性格をもって、大宰府を守る形で様々な軍事的な造営が行われた。防人・烽火（とぶひ）・古代朝鮮式山城群・水城・怡土城跡などが営まれた。防人は大宰府に直属して北部九州などの防衛に当たる兵力であり、大宰府の下防人司が管轄した。西海道諸国の軍団の兵力も、直接には諸国国司の管理下にあるが、諸国司の上に大宰府が位置した。防人・烽火や水城は六六三年の白村江の敗戦の翌年に緊急に作られ、さらに翌年に長門城・大野城・基肄城などの古代朝鮮式山城群が百済の渡来系技術で作られたことが『日本書紀』にみえる。

○『日本書紀』天智三年（六六四）是歳条

対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防（さきもり）と烽（とぶひ）とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

○『日本書紀』天智四年（六六五）八月条

達率答本春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽（基肄）、二城を築かしむ。

水城…版築の敷粗朶工法、柱の埋め殺し工法、暗渠導水管の精密な工法

宗教機能としては、大宰府とセットで営まれ、西海道を代表する寺院である観世音寺の存在。その大規模なあり方は、延喜五年（九〇五）の「観世音寺資財帳」（国宝）にみられる。戒壇は、正式な僧侶となる受戒の儀式を行う場である。天平宝字五年（七六一）に内国の東大寺、東国の下野薬師寺と並んで西海道の観世音寺が正式な戒壇として認められた（「本朝三戒壇」）。

給食機能は、古代の官司で行われた官人に対する毎日の給食や食材管理など、厨が果たした機能。大宰府管下に「主厨」があり（職員令）、官司の主厨司があった。

交通機能では、西海道をはじめとする官道（駅路・伝路）や駅家の体系は、大宰府を中心に配置。そのネットワークの中で大宰府が占めた役割を、確認する必要。

（３）大宰府の諸施設

大宰府が担った多様な機能に対応して、大宰府には多様な施設が存在した。発掘調査により明らかになってきた大宰府関連の諸施設について、概観しよう。

大宰府政庁…「都府楼」とも称される。巨大な礎石が基壇上に現存する正殿を中心とするが、南から南門・中門・正殿・後殿・北門が南北に並び、中門と正殿を結ぶ回廊や南北の南門・北門が発する築地によって南北三つの区画に分けられている。中央の区画の正面に東西棟の正殿があり、その前面広場の東西にそれぞれ二棟の南北棟の脇殿が配置されている。下層の七世紀後期の掘立柱建物群（建物配置は未詳）からなる第一期、八世紀になって上記のような配置で礎石建物群が立ち並んだ第二期、天慶四年（九四一）に藤原純友の乱で焼失したのち同様な配置で再建されたのが、現在の正殿の礎石・基壇の時期にあたる第三期と時期区分される。後殿近くから削屑など大宰府木簡が大量に出土し、後殿が文書行政の場でもあったことが明らかになった。

不庁地区…都府楼前面の東西道路の南に、官衙（曹司）群の区画が並んで展開した地区が、発掘調査で確認されている。政庁前面に大宰府を構成する諸官司（曹司）の官庁街があったのである。この地区からも木簡が多く出土しており、とくに基肄城の穀の分配について記した奈良時代天平期の文書木簡は注目される。これは、基肄城の倉庫群に貯積された大量の稲穀が大宰府管理下にあり、筑前・筑後・肥前・肥後などの諸国にそれを班給する際に、大宰府官人の大監が派遣されたことを示す。

○大宰府史跡不庁地区出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稻穀随 大監正六位上田中朝〔

大宰府木簡としては、西海道管内諸国からの紫草・綿など調庸物の貢進物荷札木簡が出土している。大宰府が、管内諸国からの調庸を集約したことを示す実物史料。また南島木簡も出土している。「奄美島」・「伊藍島」（沖永良部島）と記載した木簡で、南島との交流を示す。なお、平城宮跡からは、大宰府に集まった諸国からの調綿の一部を大宰府から平城宮宛てに荷造りして貢進した際に、大宰府で付けた貢綿荷札木簡が多く出土している。大宰府で書かれたこの貢綿荷札木簡群は、材に広葉樹を用いることが特徴で、もっぱら檜・杉の針葉樹を材とした古代木簡の中で大きな特徴。

月山地区…政庁の東側の丘陵部にあたる月山地区は、史料から確認できる水時計（漏刻）が設置された場所と推測。

学校院…月山地区の東方に並ぶ地を占めて、学校院が存在した。西海道諸国の国学の上に位置する教育施設である。官人の再生産をめざして府官などの子弟を教育した。孔子廟があり、釈奠（孔子祭り）の儀礼が行われた。吉備真備が大宰府に赴任した時代に釈奠の儀礼が整えられた。朝鮮半島と類似する文様センの出土が名高いが、本格的な発掘調査はまだ。

観世音寺…西海道諸国の仏教を統括し、諸国国分寺の上に立つ大宰府の寺院であった。天平宝字五年（七六一）には、いわゆる本朝三戒壇（東大寺・下野薬師寺・筑紫観世音寺）の制が定められ、西海道諸国の沙弥が受戒する場として戒壇が筑紫観世音寺に営まれた。延喜5年（905）の『観世音寺資財帳』（国宝）を見れば、観世音寺の規模の大きさと膨大な資財を容易に知ることができる。

梵鐘（国宝）

創建期をめぐる課題 故斉明天皇の菩提を弔う
玄昉が造寺司に派遣される

玄昉 観世音寺に「左遷」

玄昉墓（観世音寺講堂跡西北側に石塔）

3. 鴻臚館

鴻臚館跡（筑紫館跡）…外国使節や日本から派遣される遣唐使・遣新羅使たちを迎える迎賓館が博多湾沿いのこの地に営まれていた。遣新羅使が新羅への渡海に際して読んだ和歌が、『万葉集』にも伝えられている。

鴻臚館の南館・北館の東に開いた門は、低地に降りてから、水城の西門へとつながる大宰府に向けた直線官道とむすびついていてと考えられる。博多湾に船で到着した海外使節（新羅からの遣日本使）は、この鴻臚館に安置されて過ごし、交易も行われた。大使・副使以下主要な使人たちが大宰府まで赴き、大宰府客館に入って、大宰府で帥・大貳・少貳以下の官人と対面して外交儀礼を行ったと思われる。大使たち一部は瀬戸内海を東に行き、難波津から平城京へと入って中央での外交儀礼にあたった。のち九世紀には、鴻臚館は、来朝した新羅使・新羅商人らとの間で鴻臚館交易とも呼ばれる対外交易の場ともなった。十世紀以降には、対外交易の場は鴻臚館から博多の地へと移っていった。

1987年に旧平和台球場の改修工事が史跡文化財の無断現状変更で施行された時に、西アジアのガラス・イスラム陶器や中国・朝鮮半島の陶磁器などの優秀な器物が出土し、鴻臚館跡は保存されることに。球場はツインドームに移転して、鴻臚館跡は史跡整備されることに。

溝で区分される南館・北館の二つの客館からなり、七世紀代の掘立柱建物群から八世紀以後の礎石建物群へと変遷したことが発掘調査により明らかになっている。九世紀代の、優秀なイスラム陶器・ガラス器・中国陶磁器などが出土している。

区画西側のトイレ遺構から、ちゅう木（古代のトイレットペーパーの木棒）に転用された七世紀末の木簡が出土。この鴻臚館跡出土木簡には、豊前国京都郡や南海道の讃岐国三木郡からの庸米等の貢進物荷札木簡があり、大宰府や平城京に送られるべき国家的貢進物が、大宰府のもと国家的施設の鴻臚館に転送されていた。

（豊前国）

○・京都郡庸米六斗

・□□[]□[]月

一八六×二一×八

○讃岐国三木郡□□六斗

二一三×（二一）×四 ○三一

平安時代末にも、南館・北館の重層の東門の二階などの場で、来朝した宋商人たちとの間で、酒食の宴会とともに、漢詩を読み合う文化的な海外交流が展開したことが知られる。恒常的な対外交流、交易・文化交流の場として、平安時代にも博多湾沿いの高台に営まれた鴻臚館が機能したことが知られる。

おわりに

あたらしい日本史の動向の一つは東アジア（ユーラシア）的規模の国際関係の視座から列島の歴史を見直す所にある。その点「文明のクロスロード」として東アジアの交流史の中で大宰府跡や鴻臚館跡が果たした機能を明らかにすることは意義がある。また、古代国家における海外や中央・地方との関係を立体的にとらえ直す道を開くことになる。

鴻臚館跡は、こうした古代国家や大宰府の対外交流の歴史を理解する上で、重要な知見をもたらす遺跡であり、出土遺物であった。

福岡市で毎日展開している発掘調査や研究・展示が多くの成果を挙げてきた基盤は、地道な発掘調査に多く負っている。その成果が積み重なって福岡市や大宰府が担った海外交流上の歴史的意義が明らかになってきた。鴻臚館跡その他の海外交流関係史跡群の調査・研究では、今後の戦略的な発掘調査の成果を期待するとともに、史跡の整備・活用と調査・研究成果のさらなる公表・発信・展示を進めていただきたい。

参考文献

佐藤 信編『律令国家と天平文化』（日本の時代史4）、吉川弘文館、二〇〇二年
田辺征夫・佐藤信編『古代の都2 平城京の時代』吉川弘文館、二〇一〇年
藤井功・亀井明德『西都大宰府』日本放送協会、一九七七年

鴻臚館

はじめに

「鴻臚館と文明のクロスロード」鴻臚館跡発掘20周年記念シンポジウム「鴻臚館跡の輝跡」於・福岡市中央市民センター、2007年9月15日
文明のクロスロード 北部九州 大陸・半島との接点 那津屯倉 白村江の戦い
筑紫館（八世紀奈良時代）から鴻臚館（九世紀平安時代）へ

1. 鴻臚館の発掘

1987年（昭和62）発見!! 平和台球場改修工事の無断現状変更に対応した発掘調査で、遺存する遺構や素晴らしい国際的な遺物を発見。つづく福岡市教育委員会の発掘調査により、福岡市が古代から日本列島における国際的文明交流の窓口拠点であったことが証明された。現地説明会に、一万五千人の市民が駆けつけた。桑原市長の英断で、平和台球場の移転へ。

2004年国指定史跡に。球場南半で史跡整備、鴻臚館跡展示館の開設。

その後の発掘調査で、南館・北館からなる鴻臚館の全体像と当時の立地環境、時期変遷などが明らかに。福岡城跡のなかで鴻臚館跡の地区は日本古代を代表する遺跡として史跡整備する方向で検討された。

発見当初から古代の国際交流を解明する「鴻臚館学」の提唱。歴史的意義の解明・発信と覆屋など史跡整備の進展。

2. 鴻臚館の機能

迎賓館・外交・供給・儀礼・祭祀・交易・政務・警護・交通・文学交流

平安京の鴻臚館・平城京の「鴻臚館」との別 古くは「難波館」（大阪）も

日本からの遣唐使・遣新羅使も、鴻臚館に宿泊

大宰府から離れて鴻臚館が博多湾に置かれたことの意義

玄関の迎賓館としての大宰府鴻臚館 大宰府「客館」

鴻臚館から直線官道で三宅廃寺経由で水城西門に向かう交通路。西門経由で大宰府条坊の「朱雀大路」南の「客館」に。北に進んで大宰府政庁（都府楼）に至った。大宰帥と外交儀礼。

日本からの遣唐使が中国唐で受けた対応（安置）

長江河口の楊州・杭州……州都……都城郊外……長安・洛陽

到着地から首都まで赴く使節は一部の外交官・留学生・留学僧に限定される

遣唐使の随員には私的な物品の携行も認められる

「隔離」と交流 鴻臚館交易

安置・供給と放還 「天皇を中心とした小中華的華夷秩序観念」

外交と儀礼

大宰府における「国書」開封の問題 使節を宮都まで通すかの判断

供給 儀礼 饗宴 漢詩を読み交わす

境界祭祀（畿内や京に入る時も、祓いを行い飲酒する境界儀礼・祭祀）

外交の場から交易の場へ 鴻臚館から博多へ

3. 鴻臚館の構造

客館・官司・厨・倉庫・儀礼・祭祀・交易・警護・交通・門・区画施設などの諸施設

東に門。東面する構造。

北館と南館 8世紀・9世紀 掘立柱建物から礎石建物へ 国家的外交施設
優秀な舶来遺物の出土 9世紀のイスラム陶器・ガラス・中国陶磁器・新羅土器
金の塊の出土…日本側からの交易品

トイレ遺構（cf 古代秋田城の水洗トイレと豚肉食の寄生虫出土＝渤海使節の迎賓）
木簡の出土…大宰府・西海道が支えた鴻臚館

立地 博多湾の港津との関係。東側からアクセス。大宰府への直線官道

4. 鴻臚館と対外交易

律令 天長8年（831）9月7日太政官符…新羅人交関物に大宰府先買権
国家による外交・海外文物・海外情報の掌握。舶来商品の先買権

唐物（からもの）は国家のほか貴族の垂涎的（喉から手が出るほど欲しかった）

9世紀に中国・半島海商らの来航活発化

新羅海商張宝高…日韓中にわたって活躍。日本遣唐使を支えた在唐新羅人社会
大宰府官人による「存問」と中央政府の「安置・供給」官符発行と鴻臚館での供給
大宰府官人による交易

筑前守の文室宮田麻呂、承和8年（841）来日の新羅廻易使から雑物受領
国家間外交から交易中心へ 894年 菅原道真の建言により遣唐使の中止

鴻臚館における対外交易

外交から交易へ 渤海使、「商旅に異ならず」 大宰府による舶来商品の先買
「宋商客宿坊」に

5. 鴻臚館から博多へ

鴻臚館の対外交易機能の終焉 11世紀中葉

中国・半島海商らの日本居住 「唐坊（唐房）」…大宰府官人らとの関係

唐（618～907）から宋（960～1127。南宋1127～1279）

新羅（676半島統一～935）から高麗（918建国、936半島統一～1392）

唐・新羅商人から宋・高麗商人へ

11世紀後半～12世紀前半 博多遺跡群 中国製陶磁器の大量出土

平氏政権 平清盛は日宋貿易の利益をもとに政権掌握

14世紀前期 韓国新安沖海底沈船 「東福寺」木簡出土。日本人の趣向に合う中国陶磁器（龍泉窯青磁）が船荷。中国から半島経由で日本に向かう交易船。

おわりに

鴻臚館と律令国家 開かれた日本列島と北部九州の先進文化受容 最澄・円仁
と9世紀の仏像 舶来陶磁器の分布 鴻臚館跡の史跡整備と「鴻臚館学」の新展開へ

参考文献

河添房江『唐物の文化史』岩波書店、2014年

佐藤信『大学の日本史①古代』山川出版社、2016年

佐藤信『古代史講義【海外交流篇】』ちくま新書、2023年

森克己『森克己著作選集 第一巻 新訂日宋貿易の研究』国書刊行会、1975年

山内晋治『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、2003年